
涼宮ハルヒの召喚獣

takumi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒの召喚獣

【Nコード】

N9987Y

【作者名】

takumi

【あらすじ】

試験召喚システムを採用する文月学園に不思議を求めるSOS団がやってきて……

1章 放課後の遭遇（前書き）

二次創作です。涼宮ハルヒの憂鬱とバカとテストと召喚獣のクロスオーバーになります。

1章 放課後の遭遇

「試験召喚^{サモン}」

新緑が生い茂る五月の放課後、僕はいつものように鉄人に雑用を
いいつけられていた。

「さっきも言ったが今日の仕事はここにある木材を校舎裏の廃材置
き場まで運ぶことだ。よし始めろ」

ちっ、えらそうに。もしも願いがかなうなら今すぐ鉄人を殴り倒
して帰りたい。召喚獣よりも強い規格外な鉄人を倒せるはずもなく、
そんなことすれば僕に待っているのは死よりも過酷な運命なのでこ
こはおとなしく従うしかない。

「わかりました」

そして、あと一往復で今日の仕事も終わりだろうかというところ
だった。

「ちよつと見なさいキョン！ 小さい子供が自分の何倍もあるよう
な木材を運んでるわ！」

「な、なんだあれは！」

声が聞こえたほうに目を向けると頭に黄色いリボン付きの力チユ
ーシャをつけた美少女をはじめとする五人組が裏門のほうから僕に
熱烈な視線を向けている。

「ちよつと、何かしらあの子！ 不思議だわ！ 不思議だわ！ 古
泉君、何かしらあれ！」

「申し訳ありません僕にはちよつとわかりません」

「わあかわいいです！」

「……ユニーク」

「おいハルヒ、あまり見るな失礼だろ」

僕の視線に気づいた男子生徒が門に両手をかけショーウィンドウ
を見るような眼をしている力チユーシャの子を制していた。

「あの、なにか？」

ただ見られているというのも気まずかったので五人組に話しかけてみた。

「ああ、いえすみません。ちょっと珍しかったもので」

Fクラスのクラスメイトにはいないような常識人っぽい男子生徒が僕の召喚獣に目を向けながら返してきた。

「これですか？」

「そうよ！ その子一体どうなってるの！？」

「だから失礼だろハルヒ」

「いえいいんです、これは僕の召喚獣ですよ」

『召喚獣？』

五人組うち小さい女の子を除く四人が一様に声をそろえた。

「ここ文月学園はテストの点数で強さが変わる試験召喚システムというものを導入してるんです」

すると背の高い優しそうな男子生徒が反応をみせた。

「試験召喚システムですか……噂には聞いたことがありますね」

「古泉君何か知ってるの？」

「はい、詳しくは知りませんがあちらの彼が先ほど述べたとおりです。召喚獣を召喚して争うことで互いの競争心を刺激し切磋琢磨していこうという制度だったはずですよ」

「ってことはあの小さい子が召喚獣である男の子が召喚者ということ？」

「そのようですね」

そこまで話したところでカチューシャの子が満点の笑顔で僕に話しかけてきた。

「あなた名前は！？」

「吉井明久ですけど……あの、あなた達は？」

「これは失礼したわ吉井君！ あたしは涼宮ハルヒ！ で、こつちの背が高い男の子が古泉君、ぼーっとした顔してんのがキョン、この可愛いのがみくる、ちっこいのが有希よ！」

「はあ」

「私たちは北高のSOS団といって世の中の不思議を探しているの、あなたはあたしが今まで見た何よりも不思議だわ！　誇っていいわ！」

「ど、どうも」

可愛い女の子から100%の好意を向けられるというのは照れる。

「ほら、やめるハルヒ吉井君が困ってる。ほんと失礼なやつですみません」

「なによキョン！　あんな不思議を目の前に指をくわえてろっていうわけ！」

どうやら召喚獣に興味があるみたいだ、確かに他の学校の生徒が見る機会はなかなかないだろうし。

「興味があるならこっちに来てみてくださいか？」

そう言うのを待ってましたと言わんばかりに涼宮さんは門を飛び越え召喚獣に駆け寄ってきた。

「わあちっこいし耳としっぽが生えてるわ！」

「ほんとかわいいですう」

「不思議」

「ほう、確かに」

「噂は本当だったんですね」

他の四人も寄ってきて僕の召喚獣にそれぞれの感想を言い合っている。にしてもみくるさんはことなく姫路さんに似てる気が……

「この子名前とかあるんですか？」

みくるさんが僕の召喚獣を胸の前に抱いて……おお幸せの感触が。

「いえ、召喚獣は召喚獣ですからね。自分の分身みたいなものです」

「わっ手が滑りましたあ！」

「いってー！」

頭を押さえてうずくまる僕と召喚獣を皆不思議そうに見ている。

「確かに分身みたいですね」

古泉君、冷静に分析しないでくれ。

「おい吉井、仕事は終わったのか」

ゲツ 鉄人！ もうすぐ終わるとはいえ仕事そっちのけで喋ってたなんてばれた日には自習室に監禁されてしまう。どうするべきか、その木材投げつけても鉄人は死なないだろうなあ。

「むっ 君たちは他校の生徒か、吉井の知り合いか？」

「ああいえ、僕たちはその……」

「こんにちわ、わたしは吉井君の友達の涼宮ハルヒといいます。召喚獣が珍しかったので吉井君に見せてもらっていました」

涼宮さんが僕のガールフレンドに！

「あの！ 召喚獣って文月学園の生徒以外には出せないんですか？」

「おいハルヒ何を言い出すんだお前は！」

「うちの学校でテストを受けなければ召喚獣は出すことはできない。君たちも早いところ帰るんだ」

「私にそのテスト受けさせてください！」

「他校の生徒には受けさせるわけにはいかない」

涼宮さんと鉄人が「受けさせる」「無理だ」の押し問答をしている。怖いもの知らずだな涼宮さん。

「待ちな、面白いじゃないか受けさせてやりな」

「ババ……理事長！？」

どこで聞いてたんだらうこのババアは。

「しかし理事長」

「いいんだよ、閉鎖的になるより他校と交流することで世間に対するアピールにもなるとあたしは前々から思ってたんだ、ちょうどいいじゃないか」

「本当ですか！ 任せてくださいあたしたちがバーンとアピールしてみせます！」

「頼もしいねえ、といっても今日はもう遅い、今週の日曜日にあなたたち五人でまた来なさい」

「吉井、お前のクラスから対戦相手あと四人選んどきな」

そう言い残すとババアはどこかに歩き去った。ここの瞬間文月学園初の対外試合が決定したのだった。

1章 放課後の遭遇（後書き）

原作者の方に最大の敬意を表しつつ全6〜7話くらいの予定でお送りしていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9987y/>

涼宮ハルヒの召喚獣

2011年11月30日18時47分発行